

俳句雑誌

香 雨

1

2020



雨の歌〔十二〕

片山由美子

お降りといへる言葉も美しく

高野 素十

新年の季語には忌みことばにかかわるものが少なくない。「御降り」もそのひとつで、元日、あるいは三が日に降る雨や雪のことをいう。「ふる」は「古」に通じることから口にすることを避け、「おさがり」といったのである。その発想はもちろんだが、「おさがり」という言葉じたいが美しいという、いとも単純な仕立て方がこの句の味わいになっている。因みに、御降りがあると「富正月」といい、豊穰の前兆とされた。これもまた美しい言葉である。

香雨【かぐわしい雨。めぐみの雨】

慧日晨開、香雨宵墜（慧日、晨に開き、香雨、宵に墜つ） 沈約「彌勒贊」

香雨

1月号 目次

第2巻第1号通巻第13号

表紙	2	雨の歌〔12〕……………片山由美子
	2	二十山・13……………鷹羽狩行
	4	三精集・13……………片山由美子
	6	1周年記念特別寄稿 昨日といひ今日とくらして ……………久保田 淳
	8	2020年「香雨」年間予定
	10	甘雨集・白雨集・清雨集抄……………鷹羽狩行
	12	甘雨集……………伊藤トキノほか
	14	白雨集……………有吉桜雲ほか
	18	清雨集（同人作品Ⅰ）……………山下由理子ほか
	25	俳句一言葉と表現……………丁野 弘
	26	ジオパーク吟行案内・13……………尾池和夫
	28	ひきだしの奥から・13……………大久保喬樹
	30	香雨俳句逍遥……………坂本宮尾
	32	現代俳句を読む……………牛田修嗣
	34	対談 主宰に聞く——「香雨」創刊1周年 ……………片山由美子・鶴岡加苗
	39	宿谷晃弘句集『野菊』評……………佐藤博美
	40	緑雨集（同人作品Ⅱ）……………荻原八重子ほか
	76	リスペクト狩行……………萌の会会員
	78	香雨集（会員作品）……………古賀宣道ほか
	102	二句欄から（12月号香雨集）……………鶴岡加苗
	116	選後に……………片山由美子
	118	採らなかつた句……………片山由美子
	120	句会案内
	122	香雨支部句会案内
	126	雨滴
	128	お知らせ
	130	後記……………片山由美子

は
た
ら
や
ま
二十山

13

鷹羽
狩行

門で一二枚立読み年賀状

ふすま絵の鶴も出払ひお正月

鎌倉へ電車がたがたお正月

石段が石段さそひ初詣

子は子ども走りとなりて初詣

銭湯をたのしむ旅へお正月

いづこかに鈴の音させ春着の子

久々にたたみに触れてかるた取

初夢のふたまく目から話しけり

初夢や富士はふるさとごとくあり

初夢のさめてふたたび夢の中

三精集 さんせいしゅう

13

片山由美子

炎いま龍か麒麟か牡丹焚く

牡丹焚火立ち上がる火の化身めく

あつけなく炎を上げて牡丹楳

倒れくる牡丹焚火の火の柱

ひととせのまぼろしめきて牡丹供養

ちぎれ飛ぶ牡丹供養の炎かな

束の間を牡丹焚火にぬくもりて

牡丹焚く火を囲む人包む闇

牡丹供養くすぶることのなく果てぬ

牡丹焚火尉となるまで見届けよ

夢の中にて燠となり牡丹焚火

香雨集 こうりゅうしゅう

片山由美子選

☆は推薦句

秋の夜の口に親しき相聞歌

罌雲一人になりたしと歩く

☆妻をつい探してしまふ踊の輪

蓑虫や母の知らざる父の過去

冬麗や富士山見ゆる岬まで

門に出て御用始の子を送る

鉄瓶に湯の沸く音や山眠る

木の実踏む音森中に響きけり

秋めくや茶房の壁に夢二の絵

☆すれ違ふ人のたちまち霧の中

大分 古賀 宣道

神奈川 伊藤 仁美

岐阜 坂井千鶴子

門を出て風のかすかに竹の春

夕空の隅にあふれて赤とんぼ

大瓢影もそのまま大いなる

天網の端のほつれを稲つるみ

☆露ひとつ落ちて淡海の水こだま

よく晴れて野菊のにはふ水都かな

日の温み背中に受けて大根蒔く

自転車を寝かせておきぬ台風圏

近況を問ふ子の電話秋涼し

勾玉のごときが吹かれ秋茄子

静岡 吉住 達也

神奈川 島原 恵子

海底に眠る火山や星月夜
東京 網倉 明子

もつれたる糸もてあます夜長かな
釣果てふことは古書にも夜半の秋

瞬いてネオンの灯る雨月かな

代替りせしあいさつの今年米
広島 光籬 弥生

背の順のすこし後ろに休暇明

秋うらら轆轤に土の伸び縮み

ころがして置けと冬瓜届きたる

続柄を長女と記する秋灯下
東京 佐藤 未幸

子のついて来て数へては種を採る

空つばの艇庫自在に鬼やんま

秋暑し波止場の猫になつかれて

☆香辛料にはふ横丁秋暑し
東京 石川美代子

朝霧に浮かびてゐたる竹生鳥

キッチンに空瓶にさす秋桜

アザーンの四方より聞こえ星月夜

蚊遣火や片手で開ける勝手口
東京 西田 公正

もの陰へ紛れこみたる秋の蝶

数珠玉や疏水はゆるく町なかへ

波音の少し遅れて秋の浜

☆出来秋の取り込む物に日の匂ひ
埼玉 山田 和子

裏道の小暗きところ秋海棠

踏切の向かうも一人秋の暮

しろがねの光の海や芒原

斎竹の風にさざめく秋祭

祝ぎごとに帰るふるさと葛の花

☆台風の近づく空の青さかな

留守がちの家の木犀よく匂ひ

焦げ付きし鍋底みがく稲びかり

抱へ来てどすと冬瓜土間へ置く

湖に入る流れ穏やか曼珠沙華

秋簾捲けば夕日のすべり込む

天高し子らは斜面を滑り下り
長崎 村尾 夏子

秋灯やまた読み返す入門書

☆花壇より路傍を好み鳳仙花

聞きながす父の小言や蚯蚓鳴く

つづれさせ金で繕ふ楽茶碗
千葉 田中美恵子

菊香る金婚の帯ゆるらかに

世阿弥忌や針のやうなる観世経

檸檬切る風よく通る厨窓

* * *

選後に

——「香雨集」

片山由美子

露ひとつ落ちて淡海の水こだま

静岡

吉住 達也

多分に誇張されているのだが、澄みきった鈴の音のような響きが聞こえてくる気がする。また、小さな露ひとつぶが水面に落ちた瞬間、はじけるように水しぶきが上がるのがスローモーション映像で映し出されているようでもある。言葉によるヴァーチャルリアティーの世界と云うべきだろうか。現実を超えた美しさがある。

妻をつい探してしまふ踊の輪

大分 古賀 宣道

若いご夫婦ではなさそうだ。一緒に踊りに加わってはいはぐれてしまったというのではないだろう。最初から作者は見物に回っているのである。大勢の人が廻ってくるのを眺めつつ、妻はどの辺にいるのだろうと「つい探してしまふ」というのが何とも微笑ましい。

すれ違ふ人のたちまち霧の中

岐阜

坂井千鶴子

霧がたちこめる中にいると、視界が全く閉ざされてしまうことに驚く。いますれ違った人が、もう霧に包まれていく。霧そのものもかなりの速さで流れていて、ぶつかってくるかのようだ。そんな中にいる不安感も伝わってくる。声を出して読んでみると一句にスピードがあり、内容にふさわしい表現になっていることが分かる。

香辛料にほふ横丁秋暑し

東京

石川美代子

日本に住む外国人の増加に伴い、さまざまな国のものを食べさせる料理店が増えている。エスニック料理ともなると香辛料が付き物で、店の外にまで匂いが漂ってくる。東京あたりでは大通りを一步入ると小さな店が軒を連ねている地域があり、こんな横丁も。「秋暑し」に、強烈な匂いに圧倒されている気分が感じられる。

出来秋の取り込む物に日の匂ひ

埼玉

山田 和子

豆類など、秋に収穫するものは多い。乾燥させて保存することも多く、「日の匂ひ」がそれを集約している。太陽の恵みをたっぷり受けたものの豊かさ、実りの秋の豊かさが感じられる。

台風が過ぎたあとの青空の青さかな

福島 大友 康子

台風が過ぎたあとの青空のことはよく詠まれるが、近く前の「空の青さ」というところに発見がある。まだそう近づいているわけではない。気象情報などで台風の予想進路が示され、どうもこちらへ来るらしいが、まだ嘘のように晴れ上がっている。それが逆に不安に思える青さである。

花壇より路傍を好み鳳仙花

長崎 村尾 夏子

鳳仙花は、花壇などに観賞用として植えられるのはもちろんだが、繁殖力が旺盛なので、種がこぼれたところに芽を出して生長する。道端に固まって花をつけているのをよく見かけるが、それを鳳仙花が路傍を好んでそこに咲いているのだとしたところに面白さがある。

明日できることは明日せむ秋つらら

東京 金井憲一郎

「今日できることを明日に伸ばすな」ということわざがある。勤勉を奨励する教訓といえるが、明日できることは明日やることにし、逆を言っているところにほっとするものがある。「秋うらら」の明るさがよい。実際に、「明日できることは今日するな」という某国のことわざもある。凡人はこちらに従いたくなる。

虫の闇明日の米を研いでをり

東京 三吉みどり

食事の片付けが終わわり、最後に明日の朝食のための米を研いでいるのである。あたりはずっかり静かになり、虫の声が聞こえるばかり。夜が更けてきた様子を「虫の闇」が伝えている。米を研ぎ終われば、家の中は何の音もしなくなりそうである。

シクラメンなるほどこれが真綿色

東京 小林 幸々

小椋佳の「シクラメンのかほり」が作られたのは一九七五年というのだから、もう半世紀近く前のことになる。「真綿色したシクラメンの……」という歌詞は、シクラメンの花の微妙な白さをよくとらえていると感心したものである。白いシクラメンを見て、「なるほど」と納得するのはよくわかる。

稲雀突如現れ突如去る

岐阜 白橋 國弘

稲雀の群れが一斉に降りてきて一斉に飛び立つ、という句はよくあるのだが、「突如」がその様子をより鮮明に描写しているといえる。どこからやってきたのかと思う間もなく去ってしまう、その素早さは感嘆に値する。漢字の多い字面の違和感が逆に面白さとなっている。

採らなかつた句

片山由美子

文化の日横文字多き文化欄

使はれぬ百科事典や文化の日

LEDに照明を替へ文化の日

家族みな違ふ行先文化の日

卓上のピアノ鳴らしぬ文化の日

このほか、さまざまな「文化の日」の句がありました。どれも俳句として成功しているとは思えませんでしたが、

「文化の日」というのはたいへん難しい季語といえます。

文化というものに対して何かを言おうとしているような発想がほとんどで、「文化の日」という季語からずれているのではないのでしょうか。

国民の祝日はすべて季語になっているのですが、本来、俳句とは関係性の薄いものが多く、季語として用いる難しさがあります。俳句では、少なくとも季節感がそこに必要だと思えます。

葉を落とし始まる木々の冬支度

これを「冬支度」というのでしょうか。歳時記で重要なのは季語の分類です。現代の歳時記は「時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物」と分類されています。生活は、少し古い歳時記では「人事」とされているように、人間の生活に関わることです。つまり、この句のように植物が冬支度をするとはいいません。動物の毛が生え換わるのも冬支度とはいわないのです。時々見かけるのは、山が緑から赤に更衣した、というような句です。美しく紅葉したからといって更衣したとはいいません。

「白息」「日向ぼこ」も生活の季語ですから、動物の吐く息が白いからといって「白息」とは言いませんし、日溜まりで猫が日向ぼこをしているとも言いません。

返納の運転免許敬老日

これは最近あちこちでよく出てくる内容の句です。「免許証返納を決め…」とか、いろいろな季語との取合せで目にします。作者にとつては実際に行ったことであり、感慨もあることと思いますが、個人の記録にとどめておくべき句といわざるを得ません。作品として発表すると、類想になつてしまうのです。

同じようにこの頃多いのは「暮終ひ」「終活」などです。世相を反映した言葉ですが、俳句における「詩語」になつていないといえないでしょう。

豊年やB級グルメに人の列

これも同じことかいえませう。「B級グルメ」というのは日常生活では知らない人のほうが少ないかもしれませんが、通俗的です。流行語の類は、伝達性がありますが、それは消費してしまえば新鮮さを失ってしまうものです。世相を切り取る川柳では普通に使われますが、普遍をが重視する俳句には向かないと考えるべきでしょう。

諳んずる嘶に笑ひ初高座

新年の句として詠んでいるのだと思いますが、「初高座」が季語といえるかどうか、難しい問題があります。俳人でもある咄家の方が言うには、「初高座」とは真打になって初めての高座のことであり、正月の寄席ではないそうです。「初」をつければ何でも新年の季語になるわけではありません。季語のなかでも「初雷」「初午」「初霰」「初筏」「初鮭」「初時雨」「初虹」など、「初」といっても新年の季語ではありませんので注意が必要です。紛らわしいのは「初声」と「初音」です。「初声（はつごえ）」は元朝に聞く諸鳥の声であり、「初音」は春になって初めて聞く鶯のことです。

久に訪ふ国分寺跡草紅葉

作者は、久々に国分寺跡を訪れたというつもりで「久に

訪ふ」と言っているのだと思いますが、「久に」の「久」は時間の長いこと、久しいさま、と辞書にあります。つまり、久しぶりの意の「久々」とは違う言葉なのです。

似ている言葉に「久方」があります。「久方ぶり」は「久しぶり」とほぼ同じですが、「久方の」といえば和歌の枕詞であり、「天・空・月・雲・雨・光・夜」など、大空にかかわる語にかかります。「久方の訪問」などとは言わないので要注意です。

二ヶ月の風や歩幅をやや広く

古い俳句では「二ヶ月」という使い方をしているものがあります。三音の「二月」を上五に収めるための工夫なのでしようが、古臭い印象を与えます。こういうときは「如月」などに置き換えることが考えられます。

如月の風や歩幅をやや広く

これで全く問題のない句になります。初案に縛られずに推敲することが大切です。

季語の音数の問題としては「牡丹」を「ぼうたん」と引き伸ばしたり、「夕焼」「夕立」を「ゆやけ」「ゆだち」のように縮めたりということもありますが、これは俳句独特の言い方で、問題ありません。

「香雨」以降七年間の作品から選ばれた
三、四、五、六句を収録した第六句集。



定価(本体2700円+税)
四六判/上製/220頁
ISBN978-4-04-884310-2

磨き抜かれた言葉と
確かな定型感覚が紡ぎだす
十七音の世界。

落花踏みゆく白波を踏むごとく

句集

飛英

片山由美子

 KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3 ●TEL.0570-002-301(カスタマーサポート・ナビダイヤル)

角川選書



古今の歳時記や古典を通して
歴史と変遷を探り、
季語本来の意味を浮き彫りにする。
実作・鑑賞に役立つ
画期的な季語論！
定価(本体1,600円+税) ISBN 978-4-04-703678-9

知る 季語を

片山由美子

電子版も「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。



KADOKAWA

KADOKAWA公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 0570-002-301(ナビダイヤル)